

まんだら通信

第177号 (通巻208号)

平成23年 (2011) 03月 佛誕2577年 皇紀2671年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

ボサツの心

余り聞かないお名前ですが、イギリス生まれで今年八十六歳になる、国際的に有名なロナルド・ドーアという経済学者さんがいます。

日本の敗戦後、イギリス政府から日本の農業の研究のために派遣されて、農村に滞在して村人と交わりながら研究を続け、大変な知日家になりました。

日本滞在は前後六年になるそうです。先頃NHKの『百年インタビュー』に出演された時、「時々日本にお出でになりますか」と三宅アナウンサーに聞かれ「成田に着くたびに、日本人がだんだんと元気を無くしているのが、とても寂しいです」とのお返事でした。

就職難、少子高齢化とか、経済では中国に追い越されたとか、尖閣諸島事件では、ぶつけてきた中国漁船の船長や船員に、あろうことか官房長官が記者会見で「お帰り願う」などと、明るい話が聞こえないこんな有り様では、シヨボンとなるのも無理からぬ話しかも知れません。



そこで今月は、外国人が見る日本はちよつと違う、というお話しをしたいと思えます。

竹田恒泰『日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか』(PHP新書)に出てくるお話しです。

イギリスBBC放送が平成十八年に、世界三十三カ国で四万人を対象に行った世論調査で「世界によい影響を与えている国」として日本が一番高い評価を受けたそうです。

この年は小泉総理が靖国神社参拝し、「中国を刺激するとはけしからん」とマスコミや、民主党など野党や『進歩的文化人』に叩かれた年ですね。

ところが東南アジア諸国からは、絶大な支持を受けていたという結果だそうです。この調査はその後毎年行われ、結果はいつも日本が一位から四位の地位を占めているそうです。

平成二十一年『交流協会』(国交のない台湾での日本の窓口)が、台湾で「一番好きな国はどこですか」と一千人に聞いたところ、中国二%、アメリカ五%、台湾三十一%なのに三十八%の人が日本が一番好きと答えたのだそうです。

自分の国よりも、よその国の方が好きとは理解に苦しむのですが、それに気付いた交流協会が、翌年は「台湾のほかはどこが一番好きですか」と聞き方を変えたら、日本と答えた人が五十二%にはね上がったそうです。

而も二十歳代、三十歳代に限ると、八割近い人が日本が一番好きと答えているそうです。

好きな理由は、自然が美しい、経済力・技術力が高い、きまりを守る、豊かな伝統と文化を持つということのほか、まんが・アニメなどの現代文化を通じて日本を好きになる人が多い、ということも分かったということです。

これらのうち、経済力・技術力のように形に表れるものは、納得しやすいのですが、「きまりを守る」や「豊かな文化」などは、手に取って見ることが出来ないようなものは、この国から出たことが余りない私たちには、当たり前すぎて却って分からないのかも知れません。

「人の不幸を黙って見過ごせない」のは、日本人なら当たり前。「情けは人のためならず」で、雪に閉じこめられ困っている車の人たちに、わが家のトイレを使ってもらったり、暖かいおにぎりやうどんを振る舞ったという話がありました。

暮れに話題になった、子どもの施設にランドセルを贈る話もありました。

日本人なら誰でもすることですが、よその国では珍しいのでしょうか。

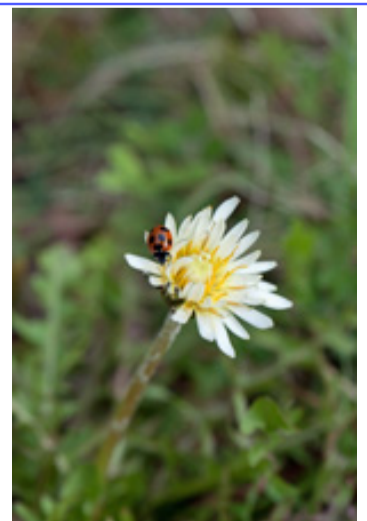
著者はこの本で触れていませんが、台湾には道徳の物差しとして「日本精神」という言葉があるそうです。

台湾統治時代、いち早く国立大学を造り、道路や鉄道を整備し、ダムを造って電力や灌漑に役立て、或いは洪水を防ぎ病院を作って風土病を退治するなどの業績が、日本に好意を寄せる気持ちの根っこにあるのかも知れません。

そういえば日本人以上に日本人らしい人は、李登輝さん、蔡焜燦さん、黄文雄さんや、最近日本人になった金美齡さんなど沢山おいでですね。

もう一つ、『エルトゥール号遭難事件』のことです。

百二十年過ぎた今も、あちらでは社会科の教科書に紹介されていて、トルコと日本の友好の証として、トルコ人ならみんなが知っている話だそうです。(次ページに続きます)



なかいせせなくて迷っている人がいたら困るなということです。そのような時は、理由など要りませんから「来月からは要らないよ」と、ハガキなり電話なり下されば有り難いです。逆に「こういう人に届けて欲しい」という時ご連絡下さい。喜んでお送りいたします。

◆九州の方ではタンポポって白いのが普通、と聞いたことがありますが、この辺りではとても珍しいですね。お寺の庭と門前にあるほかは見たことがありません。これは白花タンポポという種類だそうです。2011/03/08 龍渉

- ◆弥生。3月中旬近くというのに、なかなか春らしい陽気になりません。お元気にお過ごしでしょうか。
- ◆上の写真は、21年4月29日に館山市の中村さんが、エンジン付きのパラグライダーで空から写して下さった、白浜中学校です。特徴だったアーチ型の教室の屋根が見えますが、取り壊されて校庭になってしまい、もう見ることは出来ません。そう考えると、写真ってその時は何気なく写すのですが、あとになると貴重なものですね。上の方には新しい校舎が出来つつあります。
- ◆この『まんだら通信』は、宗教法人紫雲寺の公式な文書ではなく、『住職個人が書いている寺便り』のつもりです。“会社の公式文書”ということになると、いい加減なことが言えなくなりますから。発行の趣旨は難しいことではなく、読んで下さるあなたへの月に一度の手紙…、そして何かあった時に思い出して下されば宜しいと思っています。毎月の発行部数1,000部のうち、3割ぐらいの方が読んで下されば大成功です。私が一番申し訳なく思うことは、読みたくはないけれどもなか

余滴

明治二十三年、トルコ皇帝が明治天皇への親書と勲章を献上するための親善使節団を派遣しました。

日本国中の歓迎を受け無事役目を果たした一行は、軍艦エルトルール号で帰国の途につきましたが、横浜から出港後二日目に台風に巻き込まれ、紀伊半島沖の紀伊大島で座礁して、提督はじめ五百八十七名の命が失われました。このことを知った島民は暴風雨の夜中にも関わらず必死の救助活動をして六十九名を救い、僅かの蓄えの食料や飼っている鶏などを提供すると同時に、役所を通じ国に報告しました。

この話は明治天皇のお耳に入り、その日に軍艦八重山を派遣して遺体の埋葬などに当たらせ、健康回復した生存者を軍艦比叡と金剛に分乗させて、トルコのイスタンブールに送り届けました。

その時から百年近く過ぎた昭和六十年、イラン・イラク戦争の時、日本航空の組合の反対で、イラン滞在の日本人が取り残される事態になりました。

この時「トルコ人なら誰でもエルトルール号の恩義を忘れていません。ご恩返しをさせていただきます」と、危機一髪でトルコ航空機によって二百十五人が救出されました。

序でに思い出しました。百四年前の明治四十年三月、アメリカの大型商船ダコタ号が、白浜沖で遭難しました。

村長さんは漁師さんたちの先頭に立って救助に向かったのですが、はじめは火事場泥棒ならぬ海賊と間違えられたそうですね。

然し、お陰で乗客七百二十六名は全員救われました。

この時通訳をしたのが七浦村の早川金太郎少年で、このご縁などがあってアメリカに渡り、数々の映画に出演し、後に『戦場に架ける橋』でアカデミー賞候補になった、ハリウッドスター早川雪洲その人ですね。

につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

第十四話 盗めない

それにしても、私たち日本人はよく酒を飲みますねえ。

忘年会でしこたまいただいて、もう飲みたくないなんて思っていたくせに、年が明けますと、連日二日酔いで苦しんで、「酒のない国に行きたいね」などと言っていた人ほど、「おい、そろそろ新年会やろうぜ」ですから。

最近、気が付いたんですけど、団体で酒を飲みますと、必ず得をする人と損をする人が出てくるんですね。もうペロペロに酔ってしまつて、訳が分からなくなるほど飲んだ人がその分を払うかという、これがそうでもない。

逆に、あまり酒が飲めないんでウーロン茶なんか飲んでいた人が、ワリカンでその酔っ払いの分まで取られたりしてね。

なかには、支払いの段になると、必ずトイレにお立ちになってしまう人がいますね。支払いが終わつてみんなが外に出た頃に戻つてきて、「え、もう払っちゃったの、じゃ、いくら?」「もういいよ」

「あつ、そう、じゃ、今度は俺がおごるよ」なんて言つて、おごつてくれたためしがないという。

もつとひどいのは、酔っ払うほど飲んでしまつた後に、「俺ね、深酒と支払いは医者止められてるんだよ」なんていいかげんな野郎がいたもんでございますが……。

でも、この人たちはまだいいんです。何はともあれ、居酒屋に入るだけのお金がありますから。世の中には、お金がな

くて、ワンカップの酒を路上で飲まなければならぬ人もいますね。

通称「ドヤ街」に住む人たち。今日は、そこで起こつた話でございます。

いまから三十年前、東京のあるドヤ街にカナダから一人の宣教師がやってきました。名前をルポ・ジャンと言います。カナダ東部のケベック州生まれ、モントリオール大学神学部を卒業した彼は、このドヤ街を訪れて驚きます。

住人は昼間から酒をあおり、車道のあちこちに泥酔した男たちが寝転んでいるかと思うと、ケンカで血だらけの人もいます。「ここは本当に日本なのか」とジャンは思つたそうでございます。

暫く住んでみますと、いろいろ事情が分かつてきました。彼らは決して怠け者ではないのです。会社の倒産で路頭に迷つた人、家族との不仲で故郷を追われた人、集団就職で上京してギャンブルの深みにはまつた人……。みんな、独りぼつちの人たちだったので。

お金がないから、医者にもかかれぬ。働こうにも住所が不定なため仕事も斡旋されぬ。頼る人もいない。仕方がないから、ヤケ酒の毎日。体に良いわけがありません。

ジャンは決心をしました。一緒に助け合う日本人ボランティアを集め、相談所と無料診療所を開設しました。

「精神の健康は、体の健康から」がジャンのモットーだったからです。たくさんの方が訪れました。健康保険のない人ばかり。でも、ボランティアの日本人医師が診断し、重症患者は病院に運び入れることまでできるようになりました。

毎日、おにぎりの炊き出しも始めました。その時間になると、五百人にも及ぶ列ができました。

そんなある冬の朝のこと、底冷えがする寒さのなか、Tシャツ一枚の男がジャ

ンを訪ねてまいりました。見慣れない顔です。何日も食べていないのでしょうか。体はやせ細り、いまにも倒れそうです。ジャンは、さつそく炊き出しのおにぎりを一つあげました。

男は、むさぼるように食べると、「ここに来れば、凍死しないですむつて聞いたものだから」と、切羽詰まつた事情を息も絶え絶えにジャンに訴えました。

ジャンは言いました。「この町に来れば大丈夫。町のみんなが家族ですから……、さぞ、寒かつたでしょう。これを着ていきなさい。あなたにあげますから」

ジャンは、自分が着ていた革ジャンをその男の肩にかけてあげた。

男は何度も頭を下げて、白い息を吐きながら外に出ていった。それから、三十分もしただろうか、その男が札束を手に再び、ジャンの前に現れたのでございます。

「どうしたんですか、そんなお金」ジャンは訝しげに、彼に尋ねました。すると、男はこう言つたのです。

「このお金、あなたのジャンパーのポケットに入つていたんだよ。俺はよ、窃盗の常習犯で刑務所から出てきたばかりだけどよ、ジャンパーはありがたく貰うけれど、このお金だけは頂くわけにはいかねえもんな」

男の、シワだらけで汚れた手の平の上に、ジャンがポケットに入れておいて失念していた三十万円の札束が乗つていました。

月刊誌MOKUに連載中のお話を、作者の三遊亭鳳豊師匠と出版社のご好意で、皆様にお届けしています。

性能のよい印刷機になつた三年ほど前から、この面に印刷できるようになりましたが、今ではこのお話が楽しみ、という方が増えました。